

教員養成課程におけるピアノ実技教材『バイエル教則本』の 芸術的側面に関する考察

安江 真由美、松井 裕樹*、佐藤 友衣*
愛知学泉大学

Consideration of artistic aspect of Vorschule im Klavierspiel Op. 101 by Beyer in teacher training course

Mayumi Yasue, Hiroki Matsui, Tomoe Sato

キーワード: 教員養成課程 Teacher training course、バイエル教則本 Vorschule im Klavierspiel Op. 101、
芸術的側面 artistic aspect

1. はじめに

現在多くの教員養成大学において、ピアノ実技教材として『バイエル教則本（以下『バイエル』）』が使用されている。これは、限られた授業時間の中で効率的に技術を習得できることや、保育士や幼稚園教諭の採用試験に『バイエル』が用いられていることなどの、機能的な側面での評価が理由となっていると思われる。本学でも、『バイエル』を基調として編集された教材『教職課程のための大学ピアノ教本 バイエルとツェルニーによる展開（以下『大学ピアノ教本』）（教育芸術社出版）』を用いて授業を行っている。

しかし、『バイエル』については批判的な意見も多く、とくに、メロディーの単調さや、曲そのものが面白くないといった芸術的な側面についての批判が多いように思われる。また、『バイエル』を用いた授業では、ピアノ学習に苦手意識を持ったり、苦勞したりする学生と多く出会う。多くの教材が選択できるようになった現代において、機能的な面が評価されているという理由だけで『バイエル』を使用することには問題があるといえよう。しかし、そもそも『バイエル』は芸術的な側面における面白さはないのであろうか。

そこで、本論では『バイエル』の楽曲における芸術的な側面について考察していく。その手がかりとして、近年の研究で明らかにされた初版と現行版を比較する。『バイエル』の楽曲本来の姿に迫ることで、

その良さを考察したい。そして、音楽を楽しむレッスンへとつながる一助としたい。また、バイエルの目指した音楽教育についても理解を深めたい。

2. 『バイエル』に関する諸問題について

日本において、初心者向けの教材として最もよく使用されているといえる『バイエル』は、先述の通り様々な批判がされている。ピアニストの中村菊子は、『バイエル』について「不協和音の1つも入っていない過去のメソッドとして、今を生きる子供に適当でない」¹⁾と批判している。また、多田は、自身の研究に対して「『ソナチネ・アルバム』は芸術作品だが『バイエル』は芸術作品ではない」と言われたこともある²⁾と自らの経験を述べている。

また、幼い子どもや初心者が『バイエル』に対して苦手意識を持つ例も多く見受けられる。中村は、ニューヨークでの自身のピアノ教育の実践を振り返る中で、アメリカの子どもたちに「音楽じゃない」「みんな同じパターンでつまらない」と『バイエル』を用いたレッスンを拒否された経験を挙げ、「アメリカの子供には、『バイエル』は表情のない固い音楽で、本当につまらなかったようです」としている³⁾。また、山本は「幼いころ『バイエル』を与えられ、それが嫌でドブ川に『バイエル』を捨てて、レッスンもやめてしまった」というジャズピアニストの小曽根真の過去を紹介している⁴⁾。

こうした例は決して珍しいものではないと考えら

*愛知学泉大学非常勤講師

れるが、それでもなおピアノ初心者用の教材に『バイエル』が用いられる背景として、中村は「ピアノ初心者にはバイエル・ピアノ教則本を使用するという固定概念が日本にはある」⁵⁾と指摘する。また、柿沼らは「バイエルには様々な問題点が指摘されているにも関わらず、「多くのピアノ教育者は無自覚・無意識でバイエルを使用してきたと考えられる」⁶⁾と分析する。

他方で、『バイエル』に関する研究に対する批判もある。そもそも、日本で用いられている『バイエル』は、フェルディナント・アウグスト・バイエル(1806-1863)が作成した教本が基になったものであるが、小野らは「日本で使用されている『バイエル』は原著とは程遠いもの」⁷⁾と指摘する。なぜならば、日本で使用されている『バイエル』の多くが、ショット社から出版された初版を底本としておらず、アドルフ・ルートハルト(1849-1934)によって校訂された校訂版を底本としているからである⁸⁾。さらに日本では、「楽しいイラストの入ったもの、大きな音符に拡大したもの、併用曲などを導入した版」⁹⁾など、様々な版が存在している。それにも関わらず、研究者たちが『バイエル』の研究において「理由もなく版を選択している」¹⁰⁾と小野らは批判する。また、その原因を「「どの『バイエル』もたいした違いはない」という考えが横たわっているように見える」¹¹⁾と推測する。

こうした研究に対する批判は、前述の『バイエル』そのものに対する批判にも当てはまるものとする。つまり、現在多く見受けられる『バイエル』に対する批判は、本来の姿とは程遠い作品に対してのものであり、『バイエル』自体の評価として捉えるには問題があるということになる。従って、『バイエル』を考察するうえでは、初版と現行版の比較は必須であるといえよう。

3. 各版の比較

この章では、本学で設定している『バイエル』の中の必須課題の中で、初版と現行版での差が顕著に見受けられる曲を取り上げ、その違いを考察する。なお、使用する楽譜は、本学で使用している『大学ピアノ教本』及び、全音楽譜出版社から出版されている『全訳バイエルピアノ教則本(以下『全音』)]を使用する。また、初版として、小野らの研究と『バ

イエル』の初版が収録されている『『バイエル』原典探訪 知られざる自筆譜・初版譜の諸相』の中で紹介されている初版楽譜を使用する。

(1) アーティキュレーションの差異

1) 『バイエル』第73番

この曲では譜例 1~3 に示す通り、アーティキュレーションに違いが見られる。



譜例 1 『バイエル』第73番より、第9小節から第12小節
(『大学ピアノ教本』)



譜例 2 『バイエル』第73番より、第9小節から第12小節
(『全音』)



譜例 3 『バイエル』第73番より、第9小節から第12小節
(初版)

『大学ピアノ教本』及び『全音』は、右手に付されたスラーが一致しているが、初版では、第9・10小節と第11・12小節で異なるアーティキュレーションが示されている。このアーティキュレーションの違いから、『大学ピアノ教本』及び『全音』では、第9小節と第10小節、第11小節と第12小節でそれぞれ一つのまとまりとなっていると考えられており、同じ音型が2度繰り返される音楽として解釈されているといえる。また、左手のアーティキュレーションについても同様に考えることができる。しかし、初版では第9・10小節の右手の旋律が第11・12小節で上行するとともに、第11・12小節では2分音符一つ一つが強調され、まとまりが大きくなった左手とともに第13小節へ続く音楽となっている。第13小節からは終結部となっており、音楽が高揚した状態で終結部へ接続するように描かれているといえ

る。『大学ピアノ教本』及び『全音』では音楽がやや単調になっている印象を受けるが、初版では音楽が生き生きと描かれているといえる。全体ではたった16小節しかない小品であるが、本来はドラマティックに展開する曲として描かれていた作品といえよう。

2) 『バイエル』第93番

この曲の冒頭部分では、それぞれの版において譜例4～6に示す違いが見られる。



譜例4 『バイエル』第93番より、冒頭部分（『大学ピアノ教本』）



譜例5 『バイエル』第93番より、冒頭部分（『全音』）



譜例6 『バイエル』第93番より、冒頭部分（初版）

『全音』と初版では、右手に付されたスラーが一致している。また、『全音』では左手のスラーが2小節単位で付されており、2小節を一つのまとまりとして捉えていることがわかる。同様に『大学ピアノ教本』でも、右手に付されたスラーから、2小節が一つのまとまりとして捉えられており、同類の音型が2回繰り返される音楽として解釈されているといえる。従って、この2版は冒頭から4小節間は、2つの同類の音型のまとまりが繰り返される音楽としてこの曲を捉えている。しかし、第3小節はこの調のドミナントであるV度が置かれており、第3小節と第4小節を一つのまとまりとして考えるのは少し乱暴であると感じる。特に、『全音』で示された左手のスラーには違和感がある。

対照的に、初版における左手のアーティキュレーションは音楽と一致したものといえる。初版において第2小節の左手にスラーが付されていないのは、第1小節目と同内容のアーティキュレーションの省略と捉えることもできるが、右手の旋律と併せて考えると、その考えは当てはまらないと考える。

この曲の旋律は、冒頭部分から順次進行で上行し、第2小節目の第5拍目まででひとつのまとまりとなっている。そして、そのまとまりの中で第2小節目の第1拍のe音は、旋律の頂点である。また、このe音は、この調の属音でもあるため、第1小節と第2小節では緊張感が違う。バイエルは、この旋律の持つ緊張感を、左手のアーティキュレーションで明確に示したのであろう。つまり、第1小節と第2小節の左手は、まったく同じ音による伴奏となっているが、第1小節と第2小節の左手が同じ色合いにならないように示したものであると思われる。

また、第2小節と第4小節の左手は、構成音は同じであるのに対し、初版ではアーティキュレーションが異なっている。これは、上向した旋律の頂点であった第2小節と、旋律が下行し一旦終止する第4小節の旋律の動きと一致するものであるといえ、興味深い。

これらをまとめると、初版では、冒頭4小節が旋律の上・下行する動きとともに変化に富む音楽として描かれているのに対し、『大学ピアノ教本』と『全音』は音楽が2小節単位でまとめられてしまっており、平坦なものとなってしまっているといえる。このことから、バイエルは自分の作品を通して、指の動きのみを生徒に学習させるだけにとどまらず、旋律の動きから生まれる音楽の変化や、音楽理論の教育を試みたのかもしれない。

3) 『バイエル』第104番

この曲では、譜例7～8に示すように、アーティキュレーションの違いが見られる。



譜例7 『バイエル』第104番より、第9小節から第16小節（『大学ピアノ教本』『全音』）



譜例 8 『バイエル』第 104 番より、第 9 小節から第 16 小節
(初版)

この部分は、ヘ長調で始まった曲が転調する移行部分となる。そして第 15 小節においてヘ長調に転調する。第 11 小節・第 13 小節は、ヘ長調の属音にあたる g 音が右手の旋律で歌われているが、『大学ピアノ教本』及び『全音』ではフレーズの最後の音として扱われているため、属音としての効果はあまり感じられないようになっている。冒頭に *dolce* の指示があるこの旋律は、ここまで滑らかに歌われ、第 14 小節目に置かれたヘ長調の V_7 をきっかけにして、自然に第 15 小節目のヘ長調へ転調するようになっている。

他方、初版では第 11 小節・第 13 小節の g 音にはスラーが付されていないため、先行する小節からは独立して歌いなおすように奏する必要があるようになっている。そのためこの g 音は、冒頭から *dolce* で歌われてきた旋律が何か別な風景へと変化していくことを聴き手に予感させるようになっている。そこには、ある種の期待感や不安感のようなものが描かれており、この先展開される音楽の物語に、演奏者や聴く者は誰もが興味を持ち胸が高鳴るのではないだろうか。

バイエルの生きた時代は、ちょうどロマン派の時期にあたり、バイエルも恐らく様々な芸術に触れ生活していたことであろう。また、小野は、バイエルが「オペラの有名な曲をピアノ曲にアレンジしてはよく売れていた」¹²⁾と彼の生涯について述べている。このことから、バイエルはオペラや当時の芸術にある程度精通していたことがうかがえる。それを生かし、指の基礎的な動きやピアノ演奏の基本だけにとどまらず、音楽の面白さまでもがこの初学者向けの『バイエル』で学べるよう作品を作り、教本の終盤に載せたのではないだろうか。この第 104 番は、まさに『バイエル』の集大成ともいえる曲で、曲集

の終盤にふさわしい作品といえよう。

(2) 記譜の差異

1) 『バイエル』第 90 番

第 90 番ではアーティキュレーションの違いに加え、連桁の記譜が異なっていることが確認できる(譜例 9~11)。



譜例 9 『バイエル』第 90 番より、冒頭部分 (『大学ピアノ教本』)



譜例 10 『バイエル』第 90 番より、冒頭部分 (『全音』)



譜例 11 『バイエル』第 90 番より、冒頭部分 (初版)

『全音』と初版では、右手の第 2 小節目の第 4 拍目の音符と第 6 拍目の音符は桁で結ばれていないのに対し、『大学ピアノ教本』ではこれらは桁で結ばれている。従って、『大学ピアノ教本』では、冒頭から第 8 小節目まであまり変化のない平坦な曲に感じるのに対し、『全音』と初版では、冒頭から第 4 小節目までのまとまりと、第 5 小節目から第 8 小節目までの旋律のまとまりが楽譜からはっきりと感じられるようになっているといえる。さらに初版では、冒頭部分から第 4 小節目までにおいて、右手のどの音符

にもスラーが付されていない。そのため、この4小節は、全体的に躍動感にあふれる音楽として描かれている印象を受ける。

また、左手の伴奏に対する解釈も興味深い。『大学ピアノ教本』と『全音』は、冒頭部分に *legato* の指示があるのだが、初版では第1小節・第5小節・第8小節にスラーが付されているのみである。このスラーは、伴奏の構成音が変わった部分で付されていることがわかり、バイエルが伴奏の機能を生徒に意識させようとしていたことが感じられる。これは先述の『バイエル』第93番での考察と共通するが、バイエルが楽典についての学習も意識したということがこの曲からも推察される。

(3) ダイナミクスの変異

1) 『バイエル』第98番

この曲では、譜例12～13に示すようにダイナミクスに違いが見られる。



譜例12 『バイエル』第98番より、冒頭部分（『大学ピアノ教本』『全音』）



譜例13 『バイエル』第98番より、冒頭部分（初版）

『大学ピアノ教本』及び『全音』ではダイナミクスが一致しているのに対し、初版は第6小節のみにクレッシェンドが付されているのみとなっている。この第6小節は、直前の第5小節から V_7 の和音が続いている部分である。そして、続く第7小節で I

度の和音へ解決する。初版におけるクレッシェンドは、この一連の流れの中で付されたものと考えられることができる。つまり、このクレッシェンドは、ドミナントの和音がトニックの和音に解決する際の高揚感と一致すると捉えることができる。また、旋律の流れも第7小節で最高音に達しており、このクレッシェンドと一致する。これらのことから、初版のダイナミクスは非常に自然なものであるといえる。

それに対し、『大学ピアノ教本』と『全音』では、全ての小節にほぼ同様のクレッシェンドが追加されているため、どの小節も同様の音型の繰り返しに見えてしまいがちであり、退屈な印象を受ける。さらに、どの小節にも同じようにつけられたクレッシェンドが原因となって、この曲の特徴でもある第1小節目・第3小節目・第5小節目・第7小節目の倚音の面白さが半減してしまっているといえる。具体的には、第1小節目及び第3小節目と、第5小節目及び第7小節目は全て同じ倚音ではあるが、先行する小節が順次進行になっている第1小節目・第3小節目と、先行する小節が跳躍進行になっている第5小節目・第7小節目とでは味わいが違う。しかし、同様に付されたクレッシェンドはこれらの微妙なニュアンスの違いを感じ取ることの妨げになっているように思われる。

これらのことから、バイエルは旋律の流れや機能と和声の味わいと共に、非和声音の微妙なニュアンスの違いまでも学習させようとしていたのではないかと推察される。

(4) 音価の変異

1) 『バイエル』第100番

この曲では譜例14～16に示すように音価の違いが見られる。



譜例14 『バイエル』第100番より、冒頭部分（『大学ピアノ教本』）



譜例 15 『バイエル』第100番より、冒頭部分（『全音』）



譜例 16 『バイエル』第100番より、冒頭部分（初版）

左手のアーティキュレーションにも差異が認められるが、特筆すべき点は第5小節目及び第6小節目の左手である。『大学ピアノ教本』及び『全音』では左手は付点4分音符を伴った伴奏になっているのに対し、初版はこの部分に付点4分音符はない。初版では、冒頭で装飾音符を伴って優雅に歌われた旋律が第5小節で左手と共に軽やかに進行する音楽となり、高音で終止する変化のある曲になっているのに対し、『大学ピアノ教本』及び『全音』では、全ての小節が同じような味わいになっている印象を受ける。学習者が旋律の変化を楽しみながら、指の基礎的な運動の学習ができるよう作曲されているのではないかと考えることができる。

4. まとめ

近年の研究において、『バイエル』の初版と現行版の間には様々な箇所には差異が認められることが指摘されていたが、本稿においてはその差異が演奏にどのような変化を与えるのかを考察した。また、それらの考察からバイエルが目指した音楽教育についても推察した。

これらを通して、現行版に見られる初版との差異は、その多くが、一連の音楽が同じようなまとまりになるように、アーティキュレーションやダイナミ

クスなどが付け加えられることで生じているのではないかと推察することができる。さらに、曲によっては音価や記譜までが変更され、楽曲が一連の流れの中でまとまり、同じような動きをするように変更されていた。

このような変更は、恐らく、初学者が作品を理解しやすいようにという校訂者の配慮から生まれたものであろう。そのため、『全音』や『大学ピアノ教本』では楽曲が簡潔に見え、譜読みやがしやすい。対して、初版は、数小節の小品が複雑に見え、中には、慎重に演奏しなければ作品の持つ音楽観を表現できないのではないかと感じるものまである。現在演奏家として活動している者にも、エチュードとして使用できる価値があるかもしれない。

従って、現行版に見られるこのような変更は、悪意のあるものではないといえよう。しかし、その変更が原因となって、『バイエル』は固い音楽で表情のないつまらない音楽」といった批判につながっているのではないだろうか。言い換えれば、校訂者の思いやりが作品への批判や評価となってしまっているということである。

近年、新しいメソッドや教材が開発される中で『バイエル』の批判が多く見受けられるが、『バイエル』の作品としての価値の研究がなされないままに、その作品が批判されることはあってはならないことであると考ええる。また、『バイエル』を研究する者や使用する者が、多田が受けたような不当な批判を受けることがなくなることを願う。『バイエル』には、芸術的な良さと面白さが確かに存在するといえるからである。

しかし、これと同等に、『バイエル』の作品としての良さや面白さが研究されないまま、役に立つという理由だけで教材として使用されることも避けるべきであろう。こうした教師の姿勢からは、『バイエル』の本来の面白さや良さは、恐らく学ぶことはできないと考える。面白さが学べない以上、その教材を使用して学習する者には、苦痛や苦手意識が生まれるのは当然であろう。

『バイエル』の作品としての見直しと共に、ピアノ初学者が良さや面白さを学べるよう授業の在り方を考えていくことが、筆者らの今後の課題である。

引用文献

- 1) 中村菊子：『ピアノレッスン 世界のレッスンとレパートリー改訂版』, 株式会社ヤマハミュージックメディア, p.89 (2000)
- 2) 小野亮佑 (ほか)：『『バイエル』原典探訪 知られざる自筆譜・初版譜の諸相』, 株式会社音楽之友社, p.126 (2016)
- 3) 中村菊子：同上書, p.72 (2000)
- 4) 山本美芽：『ピアノ教本ガイドブック～生徒を生かすレッスンのために～』, 株式会社音楽之友社, p.3 (2017)
- 5) 中村礼香：ピアノ初心者のレッスンにおける教則本の比較, 鹿児島女子短期大学紀要, 50, 77-88 (2015)
- 6) 柿沼涼子 (ほか)：バスティンメソッドを軸とした新しい音楽教授法「リトミックソルフェ」に関する一考察, 大阪教育大学 幼児教育学研究室, 37, 9-17 (2017)
- 7) 小野亮佑・多田純一：『バイエルピアノ教則本』Ecole Preliminaire de Pianoの初版について - 複数の初版とその版数および刷りの解明 -, 北海道教育大学紀要. 教育科学編, 66, 195-205 (2015)
- 8) 小野亮佑 (ほか)：同上書, p.86 (2016)
- 9) 青山雅哉：ピアノ教則本の特徴 I～バイエルピアノ教則本について～, 奈良文化女子短期大学紀要, 40, 1-8 (2009)
- 10) 小野亮佑・多田純一：同上書 (2015)
- 11) 小野亮佑・多田純一：同上書 (2015)
- 12) 小野亮佑 (ほか)：同上書, p.4 (2016)

参考文献

- 青山雅哉：ピアノ教則本の特徴 I～バイエルピアノ教則本について～, 奈良文化女子短期大学紀要, 40, 1-8 (2009)
- 小野亮佑・多田純一：『バイエルピアノ教則本』Ecole Preliminaire de Pianoの初版について - 複数の初版とその版数および刷りの解明 -, 北海道教育大学紀要. 教育科学編, 66, 195-205 (2015)
- 小野亮佑 (ほか)：『『バイエル』原典探訪 知られざる自筆譜・初版譜の諸相』, 株式会社音楽之友社 (2016)
- 柿沼涼子 (ほか)：バスティンメソッドを軸とした新しい音楽教授法「リトミックソルフェ」に関する一考察, 大阪教育大学 幼児教育学研究室, 37, 9-17 (2017)
- 全音楽譜出版社出版部：『全訳バイエルピアノ教則本』, 株式会社全音楽譜出版社 (1995)
- 大学音楽研究グループ：『教職課程のための大学ピアノ教本 バイエルとツェルニーによる展開』, 株式会社教育芸術社 (2016)
- 中村菊子：『ピアノレッスン 世界のレッスンとレパートリー改訂版』, 株式会社ヤマハミュージックメディア (2000)
- 中村礼香：ピアノ初心者のレッスンにおける教則本

の比較, 鹿児島女子短期大学紀要, 50, 77-88 (2015)

馬場マサヨ：『目からウロコのピアノ指導法』, 株式会社ヤマハミュージックメディア (2017)

山本美芽：『ピアノ教本ガイドブック～生徒を生かすレッスンのために～』, 株式会社音楽之友社 (2017)